

(40) 塚崎幹夫：『星の王子さまの世界』、一一二頁。

- (21) 山本武信：『星の王子さまからの警鐘』、共同通信社、二〇〇〇、一八四―一八五頁。
- (22) 稲垣直樹：『サン・テグジュペリ』、清水書院、一九九二、一六七頁。
- (23) 山本武信：『星の王子さまからの警鐘』、一八四頁。
- (24) 塚崎幹夫：『星の王子さまの世界』、一一二頁。
- (25) 矢幡洋：『星の王子さま』の心理学』、大和書房、二〇〇〇、一六三頁。
- (26) 水本弘文：『サン・テグジュペリの『星の王子さま』——王子が訪れる六つの星の住人たち——』、八七頁。
- (27) 矢幡洋氏は、この引用文を別の視座から読んでゐる。すなわち、氏は王子さまが自分の星で労働していることに着目し、「王子さまは、自分の労働が世界のためにどのように役立つのか、ということを確認に認識しており、そういう労働をする者として自分をアイデンティファイしており、そしてそれに満足している」(『星の王子さま』の心理学』、一三三頁)と述べている。矢幡氏の認識はまちがつてはいない。しかし労働の観念を所有の観念と関連づけるべきであつたように思われる。
- (28) Yves Le Hir : *Fantaisie et Mystique dans Le Petit Prince de Saint-Exupéry*, Nizet, 1954, p. 36.
- (29) (30) 塚崎幹夫：『星の王子さまの世界』、一一〇頁。
- (31) (32) 同右、一一一頁。
- (33) (34) 同右、一一二頁。
- (35) 矢幡洋：『星の王子さま』の心理学』、七七頁。
- (36) ルドルフ・プロット：『星の王子さまの心』、一一九―一二〇頁。
- (37) 矢幡洋：『星の王子さま』の心理学』、一九八頁。
- (38) 塚崎幹夫：『星の王子さまの世界』、一一二頁。
- (39) 山本武信：『星の王子さまからの警鐘』、一八四頁。

ま』、成甲書房、二〇〇〇、二九頁)。しかし大人であれ、子どもであれ、初対面の相手には、vous を用いることがフランス語の原則であるので、王子さまは大人の話し方をしていないわけではない。注目すべきなのは、王子さまが vous を用いたことではなく、すべてが tutoyer しはじめるという事実にある。

(7) 強調(傍点)は引用者。以下、同様。

(8) Réal Ouellet : *Les relations humaines dans l'oeuvre de Saint-Exupéry*, Lettres Modernes, 1971, p.148.

(9) 山崎庸一郎：『星の王子さまの秘密』、彌生書房、一九九四、一二二頁。

(10) 同右、一三三頁。

(11) 山崎庸一郎：『サン＝テグジュペリの生涯』、新潮社、一九七一、一二三頁。

(12) 山崎庸一郎：『星の王子さまの秘密』、一六一―一六二頁。

(13) Eugen Drewermann : *L'essentiel est invisible, Une lecture psychanalytique du Petit Prince*, Traduit de l'allemand par Jean-Pierre Bagot, Les Editions du Cerf, 1992, pp. 79-102.

(14) 畑山博：『サン＝テグジュペリの宇宙』、PHP新書、一九九七、一七八頁。

(15) Yves Monin : *L'Esotérisme du Petit Prince de Saint-Exupéry*, Nizet, 1975, p. 78.

(16) 塚崎幹夫：『星の王子さまの世界』、一〇五頁。

(17) 柳沢淑枝：『こころで読む「星の王子さま」』、七〇頁。

(18) 同右、七二頁。

(19) 水本弘文：『サン＝テグジュペリの「星の王子さま」——王子が訪れる六つの星の住人たち——』、『北九州大学文学部紀要(B系列)』、一九八六、八六頁。

(20) 塚崎幹夫：『星の王子さまの世界』、一二二頁。

人を身分・職業によって分類し、作品執筆当時の「社会の指導的階層」に属する「責任ある人たち」が、非難・攻撃されているのだと解釈している。<sup>(40)</sup> この解釈は一見すると整合性をもっている。しかし、地理学者を学者の代表とみなすのに異論はないとしても、星の住人たちを大人の身分・職業と結びつけて考えるのは、一面的な、さらには独善的ですからある理解の仕方だと思われる。実業屋が実業家をあらわすと言っても、同語反覆でしかなく、何も読みとったことにならない。星の住人たちの在り方は、身分・職業を越えた、もっと広い範囲の大人の典型・類型を示すものとして考察されるべきである。この節において、私は自分なりの考察をおこなった。王子さまの星めぐりをつうじて展開される大人批判にかんしては、注目すべき他の解釈も出されている。これについては、次節で問題にしたい。

## 註

- (1) テクストはブレイアード版を用いる (Antoine de Saint-Exupéry : *Le Petit Prince, Œuvres complètes*, t. II, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1999)。引用文の頁数は本文で示す。
- (2) Nathalie des Vallières : *Saint-Exupéry, L'archange et l'écrivain*, Gallimard, 1998, p.91.
- (3) 塚崎幹夫：『星の王子さまの世界』、中公新書、一九八二、四頁。
- (4) 同右、一五頁。
- (5) ルドルフ・プロット：『星の王子さまの心』、パロル舎、一九九四、二六頁。
- (6) 柳沢淑枝氏は、王子さまが *tutoyer* ではなく、*vouvoyer* から始めたことを問題にして、王子さまが「小さな子ども」なのに、「大人っぽい口調で話かけてきた」とみなし、「かれのかわいらしさがにじみ出ている」と述べている（『こころで読む「星の王子さ

ものではない。言いかえれば、不変（＝普遍）性が問題なのであって、変化するもの、一時的なもの、個別的・特殊なものは顧慮の外に置かれている。しかしながら、現実の世界における、海や河や町や山や砂漠が、人間（の生）にたいしてなんらかの意味・価値を帯びてくるのは、その永遠の、普遍的な相によってではなく、時の推移のなかで変化していく特殊相、個別的な相によってである。そうした特殊相、個別的な相によってはじめて、これらの事物は生きたものになるのだ。それに現実生活のなかで、人がより深い関係を結ぶのは、バラの花のような「束の間の」存在とである。不変（普遍）的なものを過度に追いもとめる地理学者は、生きたものから目をそむけ、死んだ事物にかんする知識の獲得に没頭していると判定できる。塚崎幹夫氏は、地理学者をとおして、「生きている人間の運命には鈍感で、死んだ事物の知識のほうをありがたがる学者たちが、批判されている<sup>38)</sup>」と述べている。第十五章には、開いた本の空白の頁を前にした地理学者の絵が挿入されている。この空白の頁は、地理学者に面会しにくる〈探検家〉がないことを示している。と同時に、彼の学問の不毛性を象徴的に語っている。山本武信氏は、地理学者を「象牙の塔の世間知らず<sup>39)</sup>」と規定している。地理学者は、実生活とは無縁のところ、死んだ学問を空しく探索する学者たちを表徴していると断定しよう。

地理学者は、王子さまが星を立ち去る間際、「こんどはどこの星を見物しに行ったらいいでしょうか？」（二八三頁）と意見をもとめたとき、地球に行くことを勧めている。地理学者は王子さまの旅の行程で、あるいは物語の進展のなかで、王子さまを地球に誘導する役目になっていく。この点において、彼は王子さまの援助者である。それゆえ、地理学者が批判の対象となっていることを看過してしまいがちである。けれども地理学者もまた、第十四章の点燈夫とともに、大人の類型・典型をあらわす人物として、批判的に描かれていることに変わりはないのである。

王子さまの星めぐりを、大人批判という観点から瞥見してきた。その過程で、若干の人たちの意見を紹介した。この中で塚崎幹夫氏の見解は、再度取り上げる必要があるだろう。塚崎氏は、王さま―政治家、うぬぼれ屋―文学者と知識人、飲んだくれ―詩人と芸術家、実業屋―実業家、点燈夫―宗教家、地理学者―学者、といったように、星の住人たちが表現する大

自分の星に、海や河や、町や山や、砂漠があるのかどうか、正確に答えることができない。地理学者は他人の体験談を記録するだけで、自ら実地に検証することをしない。したがって、自分の星については、何も知らないのである。地理学者は間接的な知識を偏重し、自分じしんの体験をないがしろにしている。矢幡洋氏はこの事実に着目して、「地理学者は、情報を介してしか物と関係していない。私には、今日の情報化社会を諷刺しているようにすら感じられる。私たちもまた、メディアを通してもたらされる間接的な現実にはしか触れていなくせに、随分と物知りになったつもりになっているのだ」と言っている。たしかに、現代人の在り方は、自らの直接的な体験ではなく、メディアからの情報によって間接的に現実を認識するという点で、地理学者の在り方につうじる面を有するかもしれない。いずれにせよ、間接的な知識だけを拠り処にする地理学者は、抽象的なもののように傾斜しており、具体的な現実から遊離しているように見える。

地理学者はまた、事物の個別性・特殊性を軽視している。彼は自分の本に書くために、王子さまの星の話を書くことにする。「火山が二つあります。活火山が二つと休火山が一つ」(二八二頁)と王子さまが伝えると、「火山が消えていようと、目をさましていようと、わしらにとっては同じことだ」(二八二頁)と言いはなち、「わしらにとって重要なのは、山なんだ。山は変わらないからね」(二八二頁)とつづける。地理学者にとって、活火山か休火山か、さらに火山か、単なる山か、といった差異はどうでもよい。個々の山の特殊性は捨象され、ただ山であるという普遍的な事実のみが留意される。地理学者は、王子さまの星に、とても美しい花がひとつあることを教えられる。けれども彼は花に関心を示さず、花のことをノートしない。なぜなら、「花というものは、東の間のもの」(二八二頁)であるからだ。地理学者は説明している。

「地理の本は、(…)あらゆる本の中で、いちばん大切なことが書いてある。流行おくれになることなんか、けつしてない。山が場所を変えることはごく稀れにしかないし、大海原の水がからになることも、ごく稀れにしかない。わしらは、いつまでも変わらないことを書くんだ」(二八二頁)。

地理学者にとって大事なものは、「いつまでも変わらないもの」(des choses éternelles)であり、「東の間の」(éphémères)

で、点燈夫を「カトリックの僧職者」<sup>(33)</sup>と結びつけ、最終的には、「宗教家」<sup>(34)</sup>とみなすのである。

塚崎氏は、点燈夫の仕事が時代遅れのものになってしまっていることを重視して、このような議論を繰りひろげるのである。しかし点燈夫すなわち宗教家とする解釈はあまりにも主観的である。宗教家が時代遅れの存在であるかどうかは、意見のわかれるところであるからだ。それに星の狭さから点燈夫の偏狭さを看取するのが、そもそもそのまちがいである。星の小ささは、その自転の早さ、一日の短さと関連するのであって、点燈夫の内面と照応しているわけではない。矢幡洋氏は、点燈夫の話が、「機構の融通のなさのために、個人が無意味な行動を強いられている状況を表現している」<sup>(35)</sup>と主張している。この説を踏まえると、点燈夫は、旧態依然とした、融通のきかない管理機構のなかで、命令に盲目的に服従し、ロボットのよう生きる大人たちを表象していると理解することができる。

ルドルフ・プロット氏は『星の王子さまの心』において、点燈夫の服している命令が、「人の「習慣」<sup>(36)</sup>とかもつと大きくいえば、「伝統」という意味ではないでしょうか」と問いかけている。この見方は面白いけれども、問題をはらんでいる。なぜなら、〈習慣〉とか〈伝統〉には、すべてが時代遅れの、打破すべきものばかりであるとは言いきれず、たとえ古いとしても、守るべき良きものも少なからずあるからだ。〈習慣〉〈伝統〉といった概念を出すのならば、むしろ〈日常性〉について語るべきではないだろうか。大人たちの多くは日々の決まりきった仕事をつづける中で、感覚を麻痺させてしまい、自分の現在の生活になんら疑念をいだかない。より良い未来、より幸福な生き方を志向することもない。要するに日常性に埋没して生きている。そうした大人たちが、点燈夫をつうじて形象化されているとも考えられるのである。

第十五章、王子さまが六番目に訪れる星には、地理学者が住んでいる。王子さまから、「地理学者って何？」（二七九頁）と訊かれた彼は、「海や河や、町や山や、砂漠がどこにあるか、知っている学者のことだよ」（二七九頁）と定義している。地理学者は、これらの場所を実際に訪問し、見学した人びと、すなわち〈探検家〉と彼が呼ぶ人たちの報告をうけ、それにもとづいて本を書くことを目論む学者である。だが地理学者は仕事部屋に閉じこもったままなので、王子さまが質問しても、

「——こんにちは。なぜ今、街燈の火を消したの？」

——命令だよ、と点燈夫は答えました。や、おはよう。

——どんな命令？

——街燈の火を消すことだよ。や、こんばんは。

こう言つて、彼はまた火をつけました。

——だけど、なぜ、また火をつけたの？

——命令だよ、と点燈夫は答えました。

——わからないよ、と王子さまが言いました。

——わかるも、わからないもないよ、と点燈夫が言いました。命令は命令だよ。や、おはよう。

そして街燈の火を消しました」(二七六頁)。

点燈夫は命令に従つて、街燈に火をつけたり、消したりしている。星を光り輝かせるために、夕方になると街燈に火をつけ、朝になると火を消す。この仕事は、点燈夫の言うように、「昔は、理にかなっていた」(二七六頁)。ところが、星の回転が年を経るにつれて早くなり、王子さまがやってきた時点では、星は一分間で一周するようになった。しかし「命令は変わりはない」(二七六頁)ため、点燈夫は火の点滅を一分ごとに繰り返す。あまりの忙しさのために、休息したり、眠ったりする時間がないのである。

塚崎幹夫氏は、点燈夫を、「時代遅れの仕事、命令あるいは義務に従事している人である」と規定している。この規定は適切である。ところが、塚崎氏はさらに議論をおしすすめる。点燈夫の住む星の狭さを彼の「関心の狭さ」とうけとつて、点燈夫が、「誠意は信じられるが、時代遅れの教義に凝りかたまつていて、現実から遊離し、他のものとは対話のできない人たち」<sup>(31)</sup>を指し示すと断定する。そして「党派的な社会活動あるいは宗教活動の信者かもしれない可能性」<sup>(32)</sup>を指摘したうえ



くれを観察したあと、「おとなって、まったくとって、まったくとって、とってもおかしいんだな (décidément très très bizarres)」（二七一頁）と心の中でつぶやいている。第十三章、実業屋の星をあとした王子さまは、「おとなって、まったく完全に変わっている (décidément tout a fait extraordinaires)」（二七五頁）と裁断している。王子さまは星めぐりの過程で、大人たちに批判の目を向けている。しかも〈へんだ〉〈おかしい〉〈変わっている〉という形容詞を修飾する副詞ないし副詞句が、bien (ほんとうに) → décidément bien (まったくほんとうに) → décidément très très (まったくとって、とって) → décidément tout a fait (まったく完全に)、といったように変遷するという事実から、王子さまが大人への批判の度合いを段階的に強めていることがわかる。イヴ・ル・イールは、『サン＝テグジュペリの『星の王子さま』のなかの幻想と神秘』において、この事実を問題にしつつ、「副詞の配分が巧妙に漸次的推移の印象を与えている<sup>(28)</sup>」と論じている。また、使用される形容詞にかんして、〈へんだ〉 (étrange) と 〈おかしい〉 (bizarre) とでは大差ないとしても、さいごの〈変わっている〉 (extraordinaire) には、このほか強い批判的見地がこめられているように思われる。というのも、extraordinaire は、〈ふじうの〉に相当する ordinaire と正反対の性質を示し、〈異常な〉 〈常軌を逸した〉 という意味をも有しているからだ。それゆえ、実業屋と出会った王子さまが、「おとなって、まったく完全に変わっている (décidément tout a fait extraordinaires)」と考えるに至ることで、彼の内心で、大人にたいする批判的観点が完璧なかたちで形成された<sup>(29)</sup>と論定しうるのである。

とはいえ、第十三章をもって大人批判が終結するわけではない。第十四章、王子さまが五番目に出会う点燈夫も、次節で検討するように、星の住人たちのなかで例外的な位置を占めるとしても、やはり批判の対象となっている。点燈夫はいかなる大人を表徴しているのだろうか。今度は、この点を考察したい。

点燈夫の星はいちばん小さな星で、かろうじて彼と街燈とを住まわせる場所があるだけである。王子さまが星に足を踏み入れたとき、点燈夫は街燈の火の点滅の仕事にたずさわっている。二人がやりとりする場面を読むことにしよう。

たすら所有することに夢中になる人間であり、水本弘文氏が正しく指摘するように、「所有のための所有という出口のない世界にはまり込<sup>(26)</sup>」だ、愚かな大人にほかならない。

とはいえ、王子さまにとって、何かを所有するとは、その何かに使用価値があり、その何か、所有する主体に役立つだけではない。所有する主体がその何かに働きかけをおこなわなければ、その何かを所有したことにはならない。王子さまは実業屋に、こう言葉を継いでいる。

「ぼくは花をひとつ持っていて、毎日水をかけてやる。ぼくは三つの火山を持っていて、毎週すすはらいをする。なにしろ活動していない火山のすすはらいもするんだ。いつ爆発するか、けっしてわかりっこないからね。ぼくが火山や花を持っていることは、火山の役に立っているんだ。花の役に立っているんだ。でも君は、星の役に立っていない」(二七五頁)。

王子さまにおいて、所有するとは、所有される対象が所有する主体に役立つのみならず、所有する主体もまた、所有される対象に役立つことである。対象が主体に一方的に影響をおよぼすのではなく、対象と主体とのあいだに相互的に役立ち、必要になるという関係が成立することなのだ。この定義は深遠であり、「所有する」だけではなく、「愛する」ことの意味を示唆したものともしうけとれる。いずれにせよ、実業屋が、はじめに述べたように、数字にしか関心をもたない大人の典型としてだけでなく、所有の意味をなんら理解することなく、所有のための所有に狂奔する大人の代表として、批判の対象となっていることはまぎれもない。

このように、第十章から第十三章にかけて、大人批判が展開されている。このことは、おのおのの星を訪問した直後の王子さまの心の動きをたどることによって、再確認することができる。第十章、王さまと別れた王子さまは、「おとなって、ほんとうにへんだな (bien étranges)」(二六七頁)と判じているし、第十一章、うぬぼれ屋の星を立ち去ったとき、「おとなって、まったくほんとうにおかしいんだな (décidément bien bizarres)」(二七〇頁)と思っている。第十二章、飲んだ

は五億百六十二万二千七百三十一もの星のかずを勘定している。実業屋は、たばこに火をつける暇もなく、忙しそうに星を数えている。彼は数字にしか興味が無い。第四章で、語り手の〈ぼく〉は「大人たちは数字が好きです」（二四五頁）と断言しているが、実業屋は、〈ぼく〉が批判する大人の典型であるともみなしうる。

実業屋はなんのために星のかずを計算するのか。王子さまが、「その星をどうするのか？」（二七三頁）と訊いたとき、「何もしない。でも持っているのさ」（二七三頁）と答えている。実業屋は星を所有するために、星のかずを数えているのである。「では星を持っていると、なんの役に立つの？」（二七三頁）と尋ねられた彼は、「金持ちになるのに役立つよ」（二七三頁）と返答する。「金持ちになると、なんの役に立つの？」（二七三頁）との質問には、「誰かがほかの星を見つけたら、そいつが買えるじゃないか」（二七三頁）と応酬する。王子さまがふたたび、「その星をどうするのか？」（二七四頁）と詰めよると、実業屋は、「管理するんだ。幾度も幾度も勘定しなおすんだ」（二七四頁）と言いかえす。そして「銀行にあずけることができるよ」（二七四頁）とつづける。「銀行にあずける」とは、自分が所有している「星のかずを小さな紙に書」き、「その紙を引き出しの中に入れて、鍵をかけておく」ことである（二七四頁）。だが、これでは星は、所有していても、なんの役にも立たない。王子さまは言う。

「ぼくだったら、もしマフラーを持っておれば、それを首に巻くことができるし、持ち運ぶことができる。花をひとつ持っているんだったら、ぼくの花を摘んで、持ち運ぶことができる。でも君は、星を摘むことができるじゃないか？」（二七四頁）。

王子さまは、「でも君は、星を摘むことができない」と批判している。つまり、星を自分のために自由に使うことができないのだから、星は実業屋に役立つていないと断じている。矢幡洋氏は『星の王子さま』の心理学<sup>(25)</sup>のなかで、実業屋が「交換価値」を信じるのにたいして、王子さまは、「使用価値の世界しか知らない」と論断している。王子さまにとって、使用価値のない星を所有したところで無意味である。王子さまの立場にたてば、実業屋は所有の目的・意義を考慮せずに、ひ

えよう。

次に、王子さまが三番目に訪れる星の住人、飲んだくれを見てみることにしよう。たくさんの酒壇を前にして坐っている飲んだくれに、王子さまが、「そこで何をしているの？」(二七〇頁)と問いかけると、彼は、「酒を飲んでるんだ」(二七〇頁)と陰鬱そうに答え、「なぜ、お酒を飲むの？」(二七〇頁)という質問には、「忘れるためさ」(二七〇頁)という返事をし、「忘れるって、何を？」(二七一頁)という問いにたいしては、「恥ずかしいのを忘れるためさ」(二七一頁)とうなだれながら打ち明ける。そして「何が恥ずかしいの？」(二七一頁)と王子さまがたたみかけて尋ねると、「酒を飲むのが恥ずかしいんだ！」(二七一頁)と言って黙りこんでしまう。

稲垣直樹氏は『サン||テグジュペリ』において、飲んだくれが「とどまるところを知らない一種の消費欲<sup>(22)</sup>」をあらわすと解している。この解釈は、酒が消費の対象であるということを前提にしている。しかしこの酒は、消費されるものといった意味あいをはるかに越えているように思われる。飲んだくれは、酒を飲むのが恥ずかしいがゆえに、その恥ずかしさを忘れるために酒を飲むという悪循環におちいつている。この悪循環をとおして、山本武信氏は「中毒症の自己矛盾<sup>(23)</sup>」を読みとっている。けれども飲んだくれは、ただ単なるアルコール中毒患者だけではないだろう。ここでの酒は自己の弱点を象徴し、酒を飲むとは、自己の弱点にのめりこむといった意味を合わせ持つのではないだろうか。自己の弱点に気づいたとき、その弱点をあらため、矯正し、自分の向上を目指すのが、人間のしかるべき生き方である。だが飲んだくれは、己れの弱点を認識しつつも、自虐的にその弱点の中におぼれこんでいる。塚崎幹夫氏は、飲んだくれが「詩人と芸術家」を表現するとしている<sup>(24)</sup>。しかしこれも、そんなふうに限定する必要はさらさらなし、限定することは誤りである。自己嫌悪を覚えながらも、自虐的に己れの弱さのなかにのめりこみ、奇妙な自己憐憫を見いだしている大人——そういった大人が飲んだくれをつうじて批判されていると考えておけばよいのではないだろうか。

王子さまが四番目に出会う実業屋は、いかなる大人を代表しているであろうか。王子さまが実業屋の星に着いたとき、彼

第十一章、王子さまが訪れた二番目の星には、うぬぼれ屋が住んでいる。このうぬぼれ屋は、他人から感心されることだけを願う人間であり、王子さまを見ての第一声は、「やあ！ やあ！ おれの賛美者がやってきたぞ」（二六八頁）である。うぬぼれ屋は王子さまに、幾度も（五分間も）手をパチパチとたたかせて、そのたびに帽子を持ちあげながらおじぎをし、悦に入る。うぬぼれ屋は、自分が他人より優位に立っていると思いたいし、思われたい人間である。それゆえ、他人の評価にこだわる。それもうぬぼれ屋が必要とするのは、他人の感心＝称賛である。他人の評価は自己を認識するための手がかりであり、人生をよりよくするための判断材料でしかないのに、うぬぼれ屋は他人から感心されることに人生の目的・意義を見いだしている。

作中、こうした在り方は批判的にとらえられている。王子さまから、「感心するって、それ、いったいどういうこと？」と訊かれたうぬぼれ屋は、「感心するっていうのは、おれがこの星のうちで、いちばん美しくって、いちばん立派な服を着て、いちばんお金持ちで、いちばん賢い人だと認めることだよ」と返答している（二七〇頁）。だが、「あんたの星には、あんな一人しかいないよ」（二七〇頁）と王子さまが言うように、うぬぼれ屋の星には、比較の対象となるべき他者が存在しない。この状況は、他人の評価にこだわり、優越感にひたることの愚かしさ、あわれさをひき立たせている。「おれを喜ばせてくれ。とにかくおれに感心してくれ」と頼むうぬぼれ屋に、「でも感心されるのが、なんでそんなに面白いの？」と王子さまは問い返している。人生に意味を与えるのは、他人の判断ではなく、自分じしんの主体的な判断である。他人の評価を気にするあまり、主体性を喪失してしまったという点で、うぬぼれ屋が批判されていることはまちがいない。塚崎幹夫氏によれば、うぬぼれ屋は「文学者と詩人」である<sup>(20)</sup>。この解釈は恣意的である。なぜなら、彼らのなかにも、他人の評価をそれほど意に介さず、独自の道を歩む人たちがいるはずだから。ひたすら他人の称賛を欲するとは、名誉欲に支配されることを意味するであろう。山本武信氏は『星の王子さまからの警鐘』のなかで、うぬぼれ屋が「名誉や虚栄心の空しさを象徴している」と書いて<sup>(21)</sup>いる。巨視的にとらえて、うぬぼれ屋は名誉欲にとりつかれた、虚栄心の強い大人を表象しているとい

む、広い意味での政治的人間を、王さまはあらわすと理解しておけばよいのではないだろうか。

ところで、王さまは、出発しようとする王子さまをひきとめるために、王子さまを法務大臣に任命する。これにたいして王子さまは、「でも裁判する人なんか誰もいませんよ……」（二六六頁）と発言する。すると王さまは、「では、おまえの裁判をしなさい。（…）これがいちばん困難なことじゃ。他人を裁判するより、自分を裁判するほうが、はるかに困難じゃ」（二六七頁）と反駁している。これは、きわめて説得的な、含蓄のある言葉である。ここから、王さまが聡明な理性の持ち主であることが察知される。王さまは権威・権力に執着する人間であるとはいえず、無茶苦茶な、不条理な命令をくだすわけではない。王さまは王子さまに、こう言っている。

「権威は何よりもまず理性のうえに根拠を置くのじゃ。もしおまえが人民たちに、海に行つて飛びこめと命令すれば、人民たちは革命をおこすだろう。わしの命令が理になつたものであるがゆえに、わしは服従を要求する権利があるのじゃ」（二六六頁）。

王さまは、「権威は何よりもまず理性のうえに根拠を置くのじゃ」と言っているように、理性を重視する人間であり、それゆえに、「理になつた」命令しか出さない。柳沢淑枝氏は「ところで読む『星の王子さま』」のなかで、王さまを、「命令を下す相手の限界を的確に判断できる、理性をそなえた権威主義者」ととらえている。だが王さまの誇示する権威は、「実体のない空しいもの<sup>18</sup>」であつて、「意味のない命令を出しては自己満足をしていたにすぎない<sup>18</sup>」いと締めくくっている。この指摘は正しい。実際、王さまの命令は「理になつて」いるとしても、自己の権威を保つために、やみくもに命令をくだすその姿は滑稽である。法務大臣に任命して、王子さまを自分の星にひきとめようとする姿勢からは、権力にしがみつく人間の悲哀すら感じられる。だからこそ、水本弘文氏は「サン・テグジュペリの『星の王子さま』」において、作者が王さまを、「どことなく人の良さそうな、また、寂しそうな老人<sup>19</sup>」に描いていると認定するのであろう。けれども王さまに同情の余地があるとはいえず、権威・権力にしがみつく大人として、その在り方が批判されていることは贅言を要しない。

まず第十章に出てくる王さまにかんしてであるが、王子さまを見かけるなり、「やあ！ 家来がきたな！」(二六三頁)と叫ぶ。王さまは人間関係を、服従させる者と服従する者、あるいは命令する者と命令される者という図式でしかとらえない。王さまは当然のことながら、服従させる者、命令する者の側に自分が属すると信じているので、王子さまに命令をくださいとによって、王子さまを絶対的に服従させようとする。「王さまの面前で、あくびをするとは、エチケットに反しておる」(二六三頁)との咎めにたいして、王子さまがあくびをすることを我慢できないと訴えると、王さまは、「わしは命令する、あくびしなさい (je t'ordonne de bailler)」(二六三頁)と応ずる。「氣おくれします……もうあくびできません」(二六三頁)と王子さまが言うと、「ではわしは……こう命令する、あるときは、あくびをし、あるときは…… (je t'ordonne tantôt de bailler et tantôt de...)」(二六三頁)と話す。「坐ってもいいでしょうか？」(二六四頁)と尋ねる王子さまにたいして、王さまは、「坐りなさい、命令する (Je t'ordonne de t'asseoir.)」(二六四頁)と答える。王子さまが質問することの許可をもとめると、王さまは、「質問しなさい、命令する (Je t'ordonne de m'interroger.)」(二六四頁)とすばやく反応する。このように王さまは、四度たて続けに、「わしは命令する」(Je t'ordonne de...) という言葉を繰り返すのである。

こうした言葉遣い、命令好きな態度から、王さまが自己の權威・権力にこだわり、すべてが自分の掌中にあると思ひ込みたい大人を代表すると判断することができる。塚崎幹夫氏は『星の王子さまの世界』のなかで、王さまが「政治家を風刺したものである」<sup>(16)</sup>と解している。王子さまから、「ぼく、入り目をながめたいのですが…… (…:) お日さまに沈めと命令してください」(二六五頁)と懇願されたとき、王さまは、「おまえの入り目を、おまえは見ることになるだろう。わしが要求してやろう。だが統治の術によって、都合のよい状況になるまで待つとしよう」(二六六頁)と応答している。この応答の仕方から、たしかに塚崎氏の言うように、かけひきや戦略を弄することによって、自己の地位・威光・権力を保とうとする政治家が諷刺されているとうけとれないこともない。だが権力に固執する人間は政治家だけではない。他人の絶対的服従を望

くのだ。王子さまの心の傷が、バラの理想像と実像とのあいだの差異に由来することはすでに述べた。王子さまの愛が挫折する最大の理由として、その愛の偶像崇拜的な性格を指摘することができる。

一方、バラの花は、第九章、王子さまが出発する日の朝、「あたくし、ばかだったの。(…)ごめんなさいね。おしあわせにね」(二六〇頁)と言ったあと、「もちろん、あたくし、あなたが好きなんです。あなたがそれをちつとも知らなかったのは、あたくしのせいなんです」(二六二頁)と告白する。この告白からわかるように、バラもまた、王子さまを心から愛している。しかしながら、バラは王子さまを愛するにもかかわらず、というより、愛するがゆえに、王子さまを支配しようとして女帝然とふるまうだけで、血のかよった交流を目指さない。バラは〈与える〉のではなく、〈受けとる〉ことを要求する。まるで王子さまの絶対的服従が、自分の愛の代償でもあるかのように接するのである。

このように、バラの花も、王子さまと同様に、自分の思い描く愛のかたちに忠実であろうとして、相手の現実に進みよらない。相手を自己と同じ水準でながめるのではなく、相手の現実のなかに、自己の愛の理想Ⅱ幻影を見いだそうとしている。持続的な触れあいの関係はここからは生じない。読者は第八章・第九章のエピソードをとおして、愛していても愛を表現できない、しかも、愛する意味ないし意義を理解しない、未熟な若いカップルの愛の破局の物語を読むことができる。

## 第二章 星めぐり

### (1) 大人批判

王子さまは渡り鳥を利用して、旅に出る。そして地球に降り立つまでに、六つの星を訪問する。王さま、うぬぼれ屋、飲んだくれ、実業屋 (businessman)、点燈夫、それから地理学者の住む星である。これらの星の住人たちは大人の type (類型・典型) を表現しているように思われる。はじめに、このことを明らかにするために、王子さまの星めぐりを概観しておこう。



単に妻コンスエロであるばかりでなく、同胞でもあったと思えるのです<sup>14</sup>と考えている。つまりバラが〈同胞〉をもあらわすとして解している。畑山氏は、『星の王子さま』が作者のアメリカ亡命時代に書かれ、そのあと、作者がヨーロッパの戦線に復帰するという事実を念頭に置きながら、故郷の星をはなれた王子さまがつのらせることになる望郷の念をとおして、祖国の人びとにたいする作者の愛を感じとつていたのであろう。しかしながら、王子さまが愛するバラは、複数の存在ではなく、故郷の星にただひとつしかない存在である。それゆえ、バラが〈同胞〉を表象するとする解釈も無理がある。やはりバラが愛の対象としての〈女性〉を、王子さまとバラの年齢の若さを勘案して、〈恋人〉を象徴するとみるのが妥当な解釈であると思われる。

ところで、イヴ・モナンは、『サン＝テグジュペリの星の王子さまの秘教』のなかで、バラが「性的性格を除去され、精神の象徴という地位にまで高められた〈女性<sup>15</sup>〉」であると論じている。たしかに、バラは「とてもおしゃれ (très coquette)」(二五七頁) であるとしても、官能性をまったく感じさせない。バラは、「あまりにも感動的な」(二五七頁) 美しさを保持するために、王子さまにおいては、偶像のごとき存在と化すのであろう。そして王子さまのあやまち、バラを偶像のように愛したことに存するのではないだろうか。王子さまは、「ぼくはあまりにも幼すぎたものだから、あの花を愛するすべを知らなかったんだ」(二五九頁) と〈ぼく〉に打ち明けている。王子さまの躓きは、「ぼくは言葉ではなく、行為によって判断すべきだったんだ。花はぼくをよい香りで満たし、ぼくを照らしてくれていたんだ」(二五九頁) と述懐しているように、バラの気まぐれな言葉にいちいちまどわされないだけの精神的なゆとりがなかったという点に起因するし、バラの隠された胸のうちを汲みとるだけの洞察力がなかったことに原因する。だが同時に、王子さまがバラの美しさを崇拜するあまり、バラのあるがままの現実にくしくして愛さなかったということとも密接に関係しているであろう。プラトニックな愛は、対象の現実像ではなく、えてして、その理想化された虚像を追いもとめさせる。対象を偶像のように愛するとは、結局のところ、対象そのものではなく、幻影を、自らの愛を愛することに等しい。だからこそ、王子さまは現実のバラと接触して深く傷つ

さまが愛の想念のなかで追いもとめる、バラの理想像とは途方もなくくい違っている。この差異は王子さまの心に傷を与え  
る。王子さまの出発は、愛するがゆえに蒙った、この心の傷を癒やすためのこころみであり、しかも、バラへの愛を別離に  
よって、同じことであるが、へだてを置くことによつて、なおも持続させようとするくわだてでもあると解釈することがで  
きる。

王子さまの星に出現したバラが、作者サンテグジュペリの妻となるコンスエロ・スンシンをモデルとして形象化された  
ことは、大方の研究者が一致して指摘するところである。一九三一年に結婚した二人は、「混乱と自己主張と、嫉妬と諍い」  
によつて特徴づけられる、七年間の夫婦生活を送ったあと、別居した。王子さまのバラとの別離には、作者の実生活におけ  
る、妻との別居の体験が反映しているのであろう。山崎庸一郎氏はバラのモデルとして、コンスエロのほか、若き日の作  
者の婚約者であったルイズ・ド・ヴィルモランや、パリのボシユエ高校時代の作者の同級生の姉にあたる、ルネ・ド・ソー  
シーヌの名を挙げている。<sup>(12)</sup> この二人はもちろん作者が思いを寄せた女性である。作者サンテグジュペリは、過去の自分の  
愛の体験を踏まえて、『星の王子さま』のなかの一人物、バラを造型したのである。とはいへ、私は王子さまとバラとの物  
語から、作者の伝記的事実を読みとりたいたいのではない。そうではなく、登場人物としてのバラが、作者の出会った女性たち  
の面影から出発して創造されたことを視野に入れたいだけである。とすれば、バラは当然、〈女性〉を、それも〈恋人〉を  
象徴することになるのではないだろうか。

けれども、バラの象徴性をめぐっては、異なった解釈も提出されている。オイゲン・ドレヴァーマンは『肝心なことは目  
に見えない——星の王子さまの精神分析的読解』において、王子さまが子どもであるという揺るぎない事実から、王子さま  
と共生するバラのなかに〈母〉を見てとっている。<sup>(13)</sup> しかしバラは王子さまが誕生する以前に、彼の星に存在していたわけ  
ではない。バラは、王子さまが住んでいる星に飛んできた種から芽をふいたのであつて、王子さまより年齢が下である。した  
がつて、バラを〈母〉と同一視することはできない。畑山博氏は『サンテグジュペリの宇宙』のなかで、「バラの花は、

の悲しみ、あるいは不幸意識は、王子さまがバラの花にたいしていただく期待ないし愛を想定させ、この期待または愛が裏切られたことへの反応だとみなしうるのではないだろうか。王子さまの期待は、バラが開花する以前、「小さな木」に「大きなつぼみ」が身を落ちつけるのを目撃して、「そこからあつと驚くほどの花が出てくるだろう」（二五七頁）と予感しているところから看取される。「あつと驚くほどの花」（une apparition miraculeuse）という言い方は、奇蹟的に美しい花が出現することを待ち望む王子さまの気持ちを表現している。また作中、「その花はとてもおしゃれでした。そういうわけで、花の不思議なお化粧は、幾日も幾日もつづきました」（二五七頁）という記述が見いだされる。バラは姿をあらわすまで、王子さまを好奇心で釘づけにし、王子さまに開花を待ちわびさせている。バラの花への期待の大きさは、ここからもうかがえる。バラがようやく花咲いたとき、王子さまは「感嘆の念」をこらえきれず、「あなたはなんて美しいのだろう！」（二五七頁）と叫んでいる。この「感嘆の念」（admiration）は、リアル・ウエレが『サン＝テグジュペリの作品における人間関係』のなかで指摘するように、「愛を生じさせる感嘆の念」であり、愛の結晶作用を示す。とすれば、王子さまの悲しみ、不幸意識は、期待が裏切られたことに由来し、愛する者が願望・夢想の中ではぐくむ、愛の対象のイマジユから、愛の対象の姿があまりにもかけ離れすぎていることに立脚すると考えられる。この乖離が王子さまの出発に影響をおよぼしていることは、論を俟たない。

山崎庸一郎氏は『星の王子さまの秘密』において、王子さまの出発の原因を、バラとの関係のなかで把握するのではなく、王子さまの夕陽への偏愛、すなわち、「ながいあいだ慰めとしては夕陽の静けさしか持たなかった王子さまの憂愁」<sup>(9)</sup>とのかわりで考察し、王子さまの生活の底流にあるはずの、「なんらかの空虚さ、孤独、不幸の感情」<sup>(10)</sup>を、その理由として挙げている。しかし夕暮れの観照はバラとの出会いに先立つものであり、不幸意識が際立つのは、バラとのいざこざをとおしてである。もしバラとの暮らしが平和で、幸せなものであれば、王子さまは出発する必要はなかったし、自分の星にとどまっ

てバラとともに生きてであろう。王子さまの旅立ちには、裏切られた愛との関連でとらえるべきである。現実のバラと、王子

であり、それ以降、第二十三章に至るまで、〈ぼく〉は登場人物としての立場を完全に放棄し、ひたすら語り手の役割に徹しつつ、王子さまの遍歴の全容を時間的順序に従って物語っている。この第一部では、〈ぼく〉の前に現われるまでの王子さまの彷徨と探求の旅の行程をたどりたいのであるが、まず、王子さまが自分の星を出発する事情をさぐることからはじめるよう。

(2) 旅立ちまでの経緯いきさつ

第八章において、王子さまが旅に出るまでの、故郷の星での生活が叙述されている。ある日、どこからともなく飛んできた種から、芽がふく。その芽は長い準備期間を経て、別の言葉でいえば、たつぷりと「お化粧」(二五七頁)の時間をかけたあと、美しい花を咲かせる。ところが、このバラの花は「少々気むずかしい虚栄心によって」(二五八頁)、王子さまを苦しめる。バラの花は「あたくし、風が吹いてくるのがひどく嫌なんです。つい立てを手に入れていただけませんか？」(二五八頁)と言い、「夕方になったら、覆いガラスをかけてください」(二五八頁)とたたみかけているように、矢継ぎばやに要求を突きつけ、王子さまを支配しようとする。また、「爪をひっかけてくるかもしれないわね、トラたちが！」と不安がりながら、王子さまから、「ぼくの星にトラなんかいないよ」と抗弁されると、「あたくし、トラなんかちつともこわくありませんわ」と虚勢を張る(二五八頁)。それから、「あなたのところは、とても寒いわ。ここ、設備が悪いわ」と難癖をつけ、さらに「あたしがもといたところでは……」と虚言を吐いたりする(二五八頁)。このようにバラの花は、命令や空威張りや非難や嘘によって、王子さまを翻弄し、悩ませる。王子さまはバラの花の言葉を真剣に受けとめて、悲しくなり、ついに出発を決意する。作中、王子さまの出発は、次のように説明されている。

「王子さまは、重要でない言葉をまじめにとり、とても悲しく(malheureux)なってしまったのです」(二五九頁)。

とはいえ、王子さまの旅立ちの理由として、バラの花のわがままさや高慢さをあげつらうだけでは十分でない。王子さま

ように思われる。

第七章までの導入部を検討することにしよう。第二章で、飛行士となった〈ぼく〉が飛行機のエンジンの故障のため、サハラ砂漠に不時着し、ひとりぼっちで途方に暮れているとき、小さな男の子が不意に出現する。この男の子が物語の主人公となる王子さまである。王子さまは、「お願いします……ヒツジの絵をかいて！」(二三七頁)と人なつっこくせがむ。王子さまの人なつっこさは、「お願いします」(S'il vous plait)と話しかけたときは、一般的な相手であるvousを使っているのに、すぐさま、親しい相手であるtuにたいする命令法を用いて、「ヒツジの絵をかいて」(dessine-moi un mouton)と頼んでいるところから読みとれる。この、vouvoyer (vous を用いて話すこと) から tutoyer (tu を用いて話すこと) への急速な転換は、王子さまが直ちに人に親しみを覚える性格であることを示す<sup>6)</sup>。王子さまは、「ヒツジの絵をかいて」という言葉を五度繰り返す。〈ぼく〉は飛行機の修理のことで頭がいっぱいになりながらも、王子さまの執拗な頼みを聞き入れて、ヒツジの絵をかいてやる。

第三章では、ヒツジや墜落した飛行機をめぐる、〈ぼく〉が王子さまと交わした会話から、王子さまが地球の人間ではなく、どこか別の惑星からやってきたことが判明する。しかも、「ぼくんとこ」とっても小さいんだ」(二四四頁)という王子さまの発話から、彼の住んでいた星は非常に小さいことを、〈ぼく〉は悟る。第四章において、〈ぼく〉は、王子さまの星がB-612番の小惑星であると推測している。第五章で、王子さまの星には、悪い種、すなわち、星全体にはびこり、星を破裂させてしまいかねないバオバブの種が存在することが伝えられる。第七章では、ヒツジが花を食べてしまうのではないかと心配する王子さまと〈ぼく〉との問答から、王子さまの星には、トゲのある花、バラの花がいることが示される。

第七章までは、〈ぼく〉は過去の自分の体験を報告したり、大人にたいする見解を表明したりする中で、また、砂漠で出会った王子さまへの内心の思いを披瀝しながら、王子さまにまつわることがらを徐々に読者に知らせている。この章まで、〈ぼく〉は作品の語り手であると同時に、主要な作中人物でもある。王子さまの物語が本格的に語られるのは、第八章から

## 第一部 愛の修業——王子さまの彷徨と探求

### 第一章 王子さまの出発

#### (1) 導入部の検討

『星の王子さま』は、レオン・ウエルトへの献辞の部分と、王子さまが去ったあとのサハラ砂漠の風景を描いたスケッチに付せられた、エピローグの文章とをのぞけば、全体として二十七章から成り立っている。第七章までに、飛行士の〈ぼく〉が王子さまと知り合うようになった経緯いきさつが語られる。この経緯を明らかにするまえに、前書きの価値をもつ、献辞の部分についてふれておきたい。

レオン・ウエルトとは、献辞の箇所ですべられているように、作者サン＝テグジュペリのもっとも親しい友人であったが、献辞を「子どもだったころの／レオン・ウエルトに」と訂正する過程で、作者は、「大人はみな、はじめは子どもだった。

(しかしそのことを覚えている大人はほとんどいない。)(二三三頁)と指摘している。この指摘を踏まえて、大多数の読者は、『星の王子さま』のなかに見いだされる、子どもと大人との対立に注目し、この作品が子どもとごころを持つことの重要性を教える書物だと了解することであろう。事実、ルドルフ・プロット氏は『星の王子さまの心』のなかで、「大人の社会に、渴き果てた「人間砂漠」の世界に、「子供の精神」を思い出させるために」、「この書物が「遺言」として読者に与えられたのだ、と言っている。<sup>(5)</sup> こういう見方をすることはまちがっていないし、作品理解のためにかなり有効であることはたしかである。しかしこの前書きは、『星の王子さま』がまずもって童話であることを示し、子どもたちがよりたやすく作品世界に参入しうるようになるための戦略的文章であるとうけとれる。作品世界の深層に測鉛をおろし、作品の秘められた意味を把握するためには、大人と子どもという単純な二項対立の図式によって作品をとらえる読みから抜け出ることが必要である

連のなかで作品を読むのは、作品理解のための有効な手段である。けれども『星の王子さま』が永遠のベストセラーである以上、作品を歴史（作者の伝記的事実をふくむ）のなかに位置づけるのではなく、言いかえれば、作者と結びつけるのではなく、読者の側にひきよせて、読者の立場からどう読めるかをさぐることもまた、必要なのではないだろうか。バオバブの木についての私の解釈はのちに提示するが、私は『星の王子さま』を、作者の意図や伝記的事実、あるいは歴史的背景とは一応、原則として切り離し、新しい世紀をむかえたひとりの人間が読みうる立場から検討してみたい。

『星の王子さま』には、二人の主要人物が存在する。自分の星をあとにして旅に出た王子さまと、サハラ砂漠に不時着したとき、この王子さまと出会った飛行士の〈ぼく〉とである。この〈ぼく〉は作品の語り手でもある。王子さまと〈ぼく〉とは、作品のなかで同じだけの比重を占める。したがって、二種類の読みが可能であるし、またそれが要請される。一つは、王子さまの側に立ち、王子さまの内面にそくしたかたちでの作品の読みと、もうひとつは、〈ぼく〉の側に身を置き、王子さまを外側からとらえる読みである。はじめの読みをすると、作品は王子さまの彷徨と探求の物語となる。あとの読みを採用すれば、作品は〈出会い〉の物語という様相を呈する。私はこの論文の第一部で、王子さまに焦点をあわせつつ、王子さまの彷徨と探求の物語を、愛の修業という角度から読み進めたい。第二部においては、〈ぼく〉の出会いの物語を、愛の福音という視点から分析し、王子さまが誰であったのか、誰でありうるのか、を考察したい。そして愛の修業と福音という観点に立つことよって、『星の王子さま』の総合的かつ統一的な読書を目指したいと思う。

## はじめに

アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリの『星の王子さま』<sup>(1)</sup>（一九四三）は、全世界の子どもたちに読まれている有名な童話である。それはまた、深遠な内容をふくんでいて、大人たちのために書かれた書物でもある。聖書とマルクスの『資本論』に次ぐベストセラーといわれる<sup>(2)</sup>『星の王子さま』は、時と場所を越えて、幅広い年齢層の読者を獲得してきたし、当然のことながら、今もなお、多数の人びとに読みつがれている。

『星の王子さま』にかんしては、沢山の人たちによって語られ、論じられてきた。特に二〇〇〇年のわが国では、サン＝テグジュペリ生誕百年を記念して、この作品について書かれた本が、実に四冊も出版されている。私は、フランスだけではなく、日本においてもなされてきたこれまでの読みをできるだけ多く紹介しながら、『星の王子さま』の自分なりの読みをくわだててみたい。従来の研究成果に可能なかぎり関係づけて、自己の読解を探求したい。そうすれば、展開する読みが相対化され、あらたな読書の可能性に道がひらけるからである。

私の読解の方法的立場を明らかにしておこう。これまで、『星の王子さま』は、相当数の研究者によって、作者の制作意図や伝記的事実、あるいはまた、この作品が執筆された一九四二年当時の歴史的背景とのかかわりで読まれてきた。『星の王子さまの世界』を著わした塚崎幹夫氏は、その代表である。氏は『星の王子さま』を、執筆当時の世界の危機的な状況のなかで、「どこまでも責任を感じて思いつめる一人の「大人」の、苦悩に満ちた懺悔と贖罪の書である」<sup>(3)</sup>とうけとり、この観点から、作品に作者のメッセージを読みとろうとしている。たとえば、作品第五章では、怠け者の星を破裂させ滅ぼしてしまう、三本のバオバブを描いた挿し絵を目にすることができるといえる。この三本のバオバブは、塚崎氏によれば、ドイツのナチズム、イタリアのファシズム、日本の帝国主義を表徴するという<sup>(4)</sup>。この解釈は魅力的である。時代背景や作者の意図との関



# 『星の王子さま』の読みへの招待（一）

井上三朗

## 目次

はじめに

第一部 愛の修業——王子さまの彷徨と探求

第一章 王子さまの出發

(1) 導入部の検討

(2) 旅立ちまでの経緯

第二章 星めぐり

(1) 大人批判

(2) 星の住人たちの孤独

(3) 王子さまの孤独

第三章 地球での王子さま

第二部 愛の福音

第一章 王子さまとの出会い

第二章 王子さまとは誰か

おわりに

(太字は今回掲載分)